

絵描きの中には、絵を描く前につまづいてしまう者たちがいる。彼らは規格サイズの木枠に、お手頃な価格で購入した画布を張り、買ってきたチューブ絵の具で絵を描くことを、どこか嘘っぽいと疑ってしまった者たちだ。画家とは真実を探求する生き物だ。そんな彼らに対して、メーカーが用意した量産型の画材で本当に良い絵を描け、と言う方がおかしいのかもしれない。だからこそ、つまづいた彼らは絵を描くための支持体を一から作り出す。ある者はパネルを自分で設計し、ある者は布を特殊なルートで調達し、またある者はオリジナル絵の具を開発する。絵を描くだけなのに、回りくどいことを彼らはしているものだとつくづく感じる。

そして、その疑り深い不器用な画家たちは大きなハンデを背負っている。絵を一枚仕上げるのに他の画家よりも多くの時間と資金を費やしてしまうことだ。そしてこだわりの木枠や画布に費やした目に見えぬ努力は、往々にして誰にも気づかれない。ただでさえ食べていくことが難しい画家の世界にも関わらず、薄利多売の資本主義において余計に不利な立場に自らの身を置いてしまっていると言えよう。

ルネサンスの画家たちの工房はまるで錬金術の実験場だったという。各工房には絵の具に関して秘伝のレシピがあり、それを弟子たちが継承しながら発展させていった。カラフルな顔料が粘性を持った油や樹脂と混ぜ合わせて不思議と固まり、それが画布の上でイリュージョンを魅せるという神秘的な現象がそこにはあったのだと思う。

しかしながら現代の絵画はどうだろうか。科学的に丸裸にされてしまった絵の具の定着原理を、各企業が量産し易い形で販売している。世界中どこのアートショップに訪れても似たり寄ったりの画材が手に入る。結果、資本主義的に消費しやすい絵画で溢れてしまっていないだろうか。さらに現代の画家たちは数多のSNSを通じて、イメージやモチーフ、技法を世界中のアーティストたちからリアルタイムで吸収し、そうやって流行に合わせた絵画を再度Instagramに投稿している。さらにコレクターは現物を観ずに、Photoshopで加工された作品の画像をただで購入できてしまう。現代の絵画は写真の見栄えさえ良ければ良い、イラスト的な絵となってしまっているまいか。消費しやすく、どこか薄っぺらい、現代絵画とはそういったものなのかもしれない。

絵画は所詮イリュージョンである。ただの一瞬のきらめきだ。しかし、同時に現実世界に存在している宝石でもある。写真では伝わらない物質的な絵の具の重なり合いの中で生まれる薄くとも厚みを持った美しさを、現代の画家たちは改めて探求すべきではないだろうか。いつの世も画家のライバルは歴代の巨匠たちだ。彼らの神秘的な輝きを放つ絵画に対抗するには、つまづきながらも実験的な絵画制作を行わざるを得ないのではないだろうか。

画家で東京芸大油画科の教授の小林正人はある時の新入生の説明会で、「つまづいて転んでうんこを踏んでも良い、そのうんこの中にダイヤモンドを見つけるのが絵描きってものだ。」と言っていた。不器用な画家たちよ、回り道をして沢山つまづこうではないか。本展ではそんな彼らが回り道をして、つまづきながら進む、絵画の探求の旅路に注目したい。絵画が綺麗であることには技術的な理由もあるはずだ。そんな回りくどい種や仕掛けに焦点を当てた展覧会である。

谷口洸

「ペインティング・シード」 谷口洸、花月啓祐二人展

2023年9月29日(金)～10月15日(日) 13:00～20:00 (月・火休廊)

@ギャラリー10[TOH] 渋谷区千駄ヶ谷5-20-11 第一シルバービル1B